OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メルロ＝ポンティの史的唯物論 : 〈人間主義〉からの転換というプラン
Author(s)	西村, 高宏
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44784
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【10】

氏名	西村高宏（にしむらたかひろ）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第　18295　号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	**メルロ=ポンティの史的唯物論ー〈人間主義〉からの転換というプランー**
論文審査委員	（主査） 教授　鷲田　清一 （副査） 教授　中岡　成文　　助教授　望月　太郎

論文内容の要旨

本論文は、〈人間主義〉としてその限界が語られることが多いメルロ=ポンティの思想、とりわけその歴史理論を、「ある種の史的唯物論」として提示された彼の特異な発想を解釈しながら、むしろ〈人間主義〉を超える歴史理論の構築を試みたものとして捉えなおす可能性を示そうとするものである。

本論文は、5章からなる。

第1章では、前期のメルロ=ポンティがマルクスの『経済学・哲学草稿』の影響をどれほど深く受けていたかを跡づけ、そこから導き出されたメルロ=ポンティの「人間の存在規定」を検討している。

第2章では、コジェーヴによるヘーゲルの『精神現象学』の読解をはじめとする同時期のフランスにおける「ヘーゲル・ルネッサンス」の思想運動との関係を跡づけながら、メルロ=ポンティがそのヘーゲル解釈をどのようにして自身の「実存的な歴史理解」へと接続していったかを問題とする。そしてメルロ=ポンティの「人間学的」な歴史理論解釈の鍵になるものとして、「社会的なもの」ならびに「人間的共存の論理」という概念を取りだしている。

第3章では、第2章の議論を承けて、そもそもメルロ=ポンティにとって「ヘーゲルを解釈すること」がどのような意味をもっていたのかをさらに問い詰めるなかで、「拡張された理性」や「偶然のなかにある合理性」といった用語を駆使しつつ、メルロ=ポンティがフッサール現象学の「歴史の目的論」の構想を乗り越えるという企図をもっていたことを明らかにする。

第4章では、「歴史の実存的把握」として標榜される歴史理論から「ある種の史的唯物論」として標榜される歴史理論へのメルロ=ポンティの思考の転換が、「人間学的」な視点から「物象化論的」ないしは「構造的」な視点への移行を意味していたことを、「血縁関係」「制度」「シンボル機能」といった、「物質的な媒質」の社会性に定位しつつ編みだされた概念を子細に検討してゆくなかで明らかにしている。

第5章では、最晩年のメルロ=ポンティがその「研究ノート」のなかに幾度か書きつけた「人間の裏面」という言葉を手がかりに、〈人間主義〉からの転換という彼の思考の試みを、『見えるものと見えないもの』に代表される最晩年の存在論、とりわけ「歴史の肉」という概念に関連づけながら論ずる。そして、その死によって中断された、メルロ=ポンティにおける歴史理論と存在論との交叉を確認することで、本論文を締めくくっている。

論文審査の結果の要旨

本論文の特色は、メルロ=ポンティの哲学的な歴史・政治理論とその変遷を、それに大きな影響を与えたマルクスの歴史観とヘーゲルの哲学をメルロ=ポンティがどのように解読したかという視点から論じている点にある。申請者はその課題に、これまでのマルクス解釈史、さらには戦後フランスにおける「ヘーゲル・ルネッサンス」の状況を詳しく辿るという方法で取り組んでいる。しかし、とくに疎外論の初期マルクスから物象化論のマルクスへの移行を精緻に辿りすぎたために、この部分が本論文の主旨からすればやや量的に大きすぎたことも否めない。

「人間の裏面」という表現に着目したことはメルロ=ポンティの歴史・政治理論を解釈するうえで大きな意義がある。またメルロ=ポンティの「理性」概念における、「非理性」と、非主題的なものへと地平的に「拡張された理性」とのあいだの揺らぎを、浮き彫りにするのに成功している。さらに、メルロ=ポンティ独自のフロイト解釈から出てくる「側面的カセクシス」という概念に着目して、彼の歴史理論と晩年の存在論との深い関連を示唆したところも功績がある。しかし、まさにそこのところ、つまり「人間の裏面」と（それと深く関係し、また晩年の存在論のキー概念であるところの）「肉の裂開」や「可逆性」という概念との関連づけがまだ不十分であると言わざるをえない。今後、メルロ=ポンティ晩年のテクストをさらに克明に分析しながら、申請者が試みつつある「社会的なものの現象学」を存在論的にさらに深める必要があるであろう。

議論に反復が散見されること、初期・中期・後期というメルロ=ポンティの思考の変遷についてのとらえ方に曖昧なところを残すこと、同じような課題に取り組んだ同時代あるいはやや後年のアルチェセールやアンリのマルクス解釈との比較がないことなど、細部をいえば問題はいくつかある。しかし、問題意識・論旨ともにきわめて明確でかつ一貫しており、またマルクス、ヘーゲルとの関係をここまで詳しく論じたメルロ=ポンティ研究論文はめずらしく、フランス現象学研究史に資するものは大であると判断される。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。